

刊行のことば

全国戦災都市連盟会長 姫路市長 石見 元秀

昭和二十二年一月呱呱の声を挙げた全国戦災都市連盟は昭和三十四年六月第二十三回定期総会を以ってその歴史的使命を全うし、全国都市整備促進連盟へと発展的解散を遂げたのである。

想起すれば私が戦後初代の姫路市長に就任した昭和二十一年といえ、終戦の翌年であり、姫路市も他の全国主要都市と同様、アメリカ空軍の無差別爆撃によって旧市街は一望焼野が原と化し、夥しい罹災市民・復員者の群は飢餓にせめさいなまれ、雨露をしのぐにもこと欠き、明日に生きる希望も見失い、空虚な暗いまなざしで、焼跡をさまよっていた。頼みとする市の行政機関も庁舎を焼かれ、職員は眼前の生活難に追われて四散し、最小限度の要員を確保するのに勢一ぱいで、殆どその機能は麻痺状態におかれていたのである。

こうした悪条件の重なるなかで、ズブの素人市長となった私は、この惨状を目前にしてほどこす術もなく茫然となった、というのが就任当時の偽らざる心境であった。

私は一戦災都市の市長として、まず何から手をつけるべきか、就任後日夜ひそかに腐心し、想を練った。戦災復興は言をまたぬ至上命令であった。しかし市の財政は復興事業に着手するどころか、眼前の民生安定の応急施策にもこと欠くほど窮乏しており、頼みとする中央政府も国家財政の窮迫と、占領事情に制肘されて、戦災復興に熱を入れず、補助金も微々たるもので、起債認証もままならない。一方では悪性インフレが天井知らずで押しよせてくるので、職員の最低生活保持のためのベースアップに青息吐息の有様である。このまま、推移すればせつかくの都市計画も画餅に帰するより他はないばかりか戦災都市は財政面から破局に突入するのは必至である。このような見透しから、私は自分の政治生命を賭けてもなんとかして活路を切り開かねばならぬ、と決意し、かねてからの持論である「市営企業論」をうち出したのである。

もとより戦争は人類がもたらす最大の不幸であり、永久の平和を望むことに於て私も人後におちないつもりであるが、戦争は国と国の争いであり、ことの善悪理非を超えて、一旦戦争となれば地方都市は末端の行政機関として、100%国家の戦争目的に支配され、奉仕することを余儀なくされることは今次大戦が何よりも明らかに物語っている。故にこの戦争の後始末、ことに戦災都市の復興事業はすべて政府の責任と負担に於て行うべきが当然の義務であるにかかわらず、それが実行されないとすれば、戦災都市独自のやり方で、その財源を獲得する手段を講じなければならぬ。そのためには長い平常時になれて固定してしまっている古い道徳観から一步も出られないような頭を切りかえて、生き動いている現実の情勢にマッチした施策をあえてなさねばならぬ。即ち一例として市営企業をもってヤミ利得による浮動購買力を吸い上げ、かつ敗戦の痛手で意気鎖沈している市民に娯楽慰安を与える企業、公共性が強くてしかも将来ますます需要度の高率な事業等を市営で行い、その利益を全部戦災復興事業、公共事業に投入する一石三鳥の効果をねらったのが、私の市営企業論の内容であった。

私はこの構想を競馬・競輪・宝くじ、或いはバス事業等のプランに具体化し、ただちに姫路市議会に提案して協力を求めた。幸いに賢明なる市議諸君の全面的な支持を得たので、

中央政府に対し、これが実現化に必要な諸法規の改正方を歎願したのであるが、既得権に固執するこれら関係団体の猛烈な反撃と巧妙な裏面政治工作に災いされ、その実現が容易ならざることを思い知らされ、切齒扼腕したのである。

そこで私は一戦災都市単独の力だけでは、戦災復興の財源獲得という大仕事は不可能であることを悟り、同じ苦境にあえいでいる全国の戦災都市に檄をとぼし、わが市営企業論及びその内容を開陳し、全国戦災都市連盟を結成して小異を捨てて大同につき、一丸となって政府を動かし、戦災復興の財源を獲得したいと、呼びかけたのである。

果せるかな反響は予期以上に大きく、すべての戦災都市がこの趣旨に共鳴した回答を寄せて来たので、これに力を得て本連盟の結成の機運が熟してきた翌年の昭和二十二年一月十八日、提唱都市である姫路市に於て、全国戦災都市連盟結成の運びとなったのである。

爾来十三年の星霜にわたる本連盟の活動状況並びにその輝かしい成果については本文にゆずるとして、結論的に言って、戦後全国に何々連盟というような、類似団体が数多く結成されたが、わが全国戦災都市連盟ほどスケールが大きく、実質的に活動し、大事業を成し遂げた連盟団体は他に類を見ないのであって、今さらながら本連盟の果たした役割の大きさ、存在的意義の深さに思いを至すのである。

かくも長年月にわたり同志的結合を崩さず苦楽を共にした本連盟役員、終始絶大な支援と協力を惜しまれなかった全国戦災都市国会議員連盟役員、そしてまた本連盟のあり方について常に適切な指導と協力を与えられ、全国戦災都市復興事業に全智全能を傾注された歴代の建設大臣並びに本省計画局主脳各位の御尽力に対し、会長として心から感謝の念を禁じ得ない。

私は本連盟結成以来連続七期任期満了毎に満場一致再任の栄をうけて終始会長の席をけがして来たのであるが諸賢の温かい友情と協力により、いささかの微力を尽し得たことをひそかに自負するものである。実に本連盟の会長たる職責こそは、市民の圧倒的支持のもとに任期既に五期、在任十五年にわたる姫路市長のそれと共に、私にとっては天命であり試練であったと言うべく、私の生涯に於てこれほどうち込み、かつ生甲斐のある仕事はなかったのである。

本連盟が曠古曾有の日本民族的受難のさなかに誕生し、敗戦のどん底から見事に立ち上り、再び欧米先進国水準に到達した、今世紀に於ける最も意義深き戦後十数年のめまぐるしい時代に、かくも強大な団結力と忍耐力を發揮し、独創を生かし、不倒不屈あらゆる障碍を排除し、あらゆる隘路を克服し、かくも長年月にわたって終始一貫所信を貫き、その崇高なる使命を全うして、戦後日本民族に課せられた最大至難の戦災復興という大事業を成し遂げた、この業績は関係者として誇るに足るべく、また協力者の功績を顕彰する義務を有するが故に、長く青史にとどめおかるべきであって、ここに尠大なる資料を整理編纂して本書を刊行する所以である。

昭和三十六年十二月